

ジャケットにおけるオートクチュール技法の解析 —平成23～25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」追跡調査—

Analysis of Haute Couture Techniques in Jackets, Using the Haute Couture Jacket Designed by Balenciaga in 1949: A follow-up Study on “An Analytical Investigation of Artistic Techniques in Fashion Creation” (Kitaori, T. et al. 2014. Strategic Research Base Development Grant-Aided Program by MEXT for Private Universities 2011-2013)

北折 貴子 中村 枝里子
KITAORI, Takako NAKAMURA, Eriko

1. はじめに

平成23～25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」¹⁾を北折他5名で行った。この研究は、オートクチュールからプレタポルテへの変換期に行われた技法の分析、調査研究を行い、その調査結果を基に分析例集を作成することを目的とした。

現在のファッションは、1950年代から1960年代にかけてのオートクチュール（高級婦人服）の創造を基盤として成立してきた。そのオートクチュールから量産化するプレタポルテ（高級既製服）への変換技術を探ったのが、上記の研究である。この研究にあたり、1950年代から1960年代に活躍したオートクチュールのメゾンで、現在でもプレタポルテ製品のジャケットが調査対象となり得る5社を選んで調査した。ジャケットの調査は素材、表生地パターン、縫製にわたり、デジタルマイクロスコープ、x線、メジャーや定規による計測、目視で行われた。また、この研究では非破壊を研究ポリシーとしたが、その後の展示に耐えうるよう一部の裏生地を解き、内部の縫製を調査した。研究報告書は300ページを超えるものとなり、当初予定の技法分析例集を完成させることができた。しかし時間的制約もあり、生地による実際の組み立て調査までには至らなかったため、パターン及び縫製においてなぜそのような処理を必要としたかの結論を出すには不十分であった。そこで、今回バレンシアガによる1949年制作のオートクチュールジャケットをさらに詳細に調べ、実布で試作を行うことでパターンや縫製のさらに踏み

込んだ調査を行い、技術の解析を行った。

なお、バレンシアガのメゾンや本資料の調査については、報告書に記載があるため、省略した。

2. 調査方法

上記の研究と同様、パターンについてはポリエステル60番糸を用い、地の目に沿って方眼状に糸を通し、碁盤の目状態にパターンをとり、作図を行った。また、その作図を基にレーヨン紙に写し、生地に負担をかけないようにシルクピンで最小限に止めて確認した。先の研究では上前となる右身頃の表生地のためのパターン取りであったが、オートクチュールという性格上、顧客に合わせて左右差を付けていることを考慮し、左右のパターン、および見返しや裏生地なども全て調査対象とした。試作用綿布を使用し、何度か両身頃の試作を繰り返し、パターンを決定した。縫製に関しては先の研究結果を基に実際の資料を再度確認調査しながら組立縫製作業を行った。

3. 使用素材について

本研究は複製品を作るのではなく、製作過程の縫製の意味について調査することを研究目的とした。そこで資料の生地は綾織の光沢のあるウール100%の生地であったが、同じ素材は手に入らなかったため試作では、光沢はないが同じ綾織でウール100%の素材を使用した。衿部分は資料と同じシルクベルベット、裏生地はシルクタフタを使用した。打ち合いのボタンは直

径27mmであったが、同じ形状のものは、直径25mmか29mmしか手に入らなかったため、打ち合いボタンは25mm、サイドベンツボタンは29mmを使用した。ジャケットの袖口ボタンも19mmのものが手に入らず17mmのものを使用した。肩パッドは毛芯に青梅綿を使用して同じ様に作製した。また、毛芯やダック芯、綿芯、ニット起毛芯なども同じ素材で出来る限り似た厚さや手触りのものを探して使用した。

4. パターン調査結果と解析

4-1 表身頃

オートクチュールという、顧客に合わせたパターンということで、当然左右差が生じるが、今回の資料はその後に着装者が変わったのか、体型が変化したかの理由で手直しの箇所がある。前身頃の下前である左の前中心が、見返しを2cmほど無理やり表に出して直

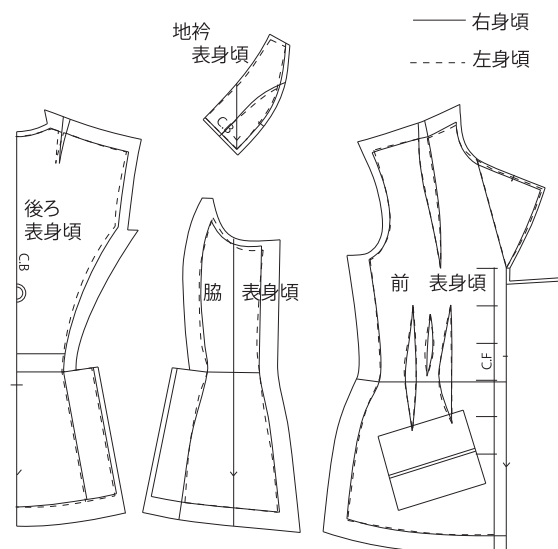


図1. 表身頃の左右差

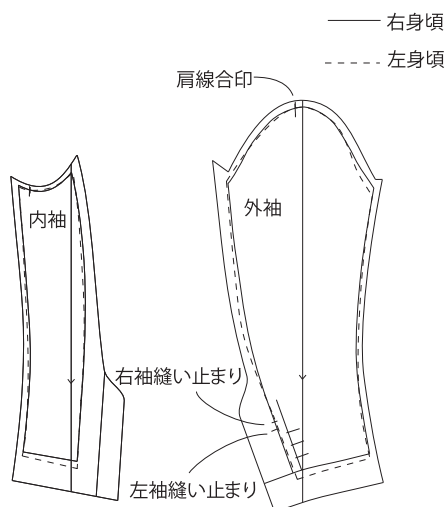


図2. 表袖の左右差

した様子がうかがえる。しかし、今回は手直し前の状態で復元を行い、パターンもそれに伴って作成した。左右のパターンを比較してみると、縫い代が均等に付けられていた右身頃を基本として裁断し、多く付けられた縫い代の範囲内で左身頃の差分を直していることが判明した。このことから、左右2枚同時に裁断していたと思われる。

4-2 見返しと衿

見返しは第1と第2ボタンの間で接いでいる。下側は前身頃からワ裁ちで裁ちだしている。上側見返しはラベル返し分のゆとりを考慮した形で変形されている。

衿は、地衿という土台の衿に対して、ベルベットという生地の特性もあり、表衿は地衿に沿わせて形づけられたと考えられる。これは、中縫いではなくメンズのカラークロス仕立てと同じ縫製方法であることから裏付けられる。

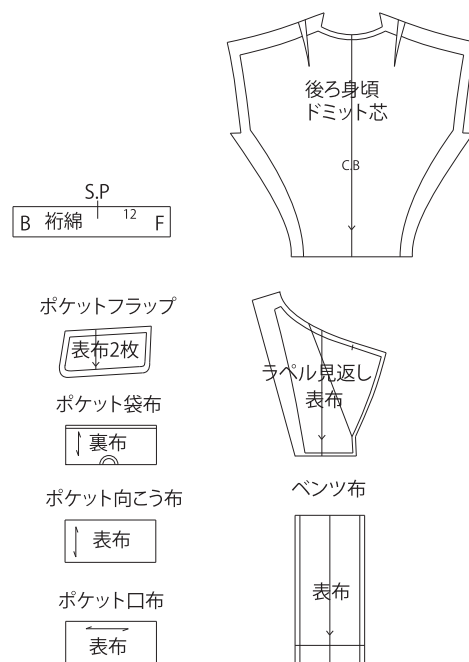


図3. 見返し、他

4-3 裏地

以前19世紀初頭のウォルトのイヴニングドレス復元を行った時²⁾と同様、表のパターンと裏生地の前身頃のパターンはかなり違い、表生地パターンからの展開と言うより、表生地より布幅の狭い裏生地を効率よく使用する工夫がされている。見返し奥は生地の耳が使用され、ほぼ地の目に沿ってまっすぐに折られ、その差分は裏生地のゆとりとして肩でタックを取り、沿わせている。

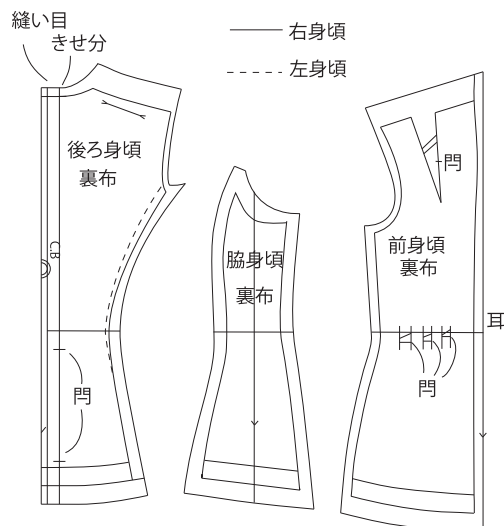


図4. 裏地・身頃

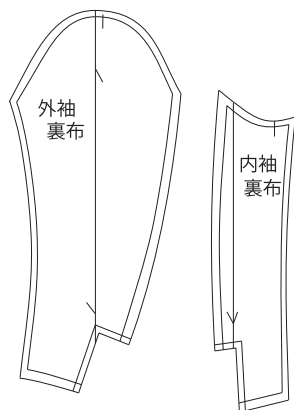


図5. 裏地・袖

4-4 芯

前芯は表生地に沿わせて据える作業があるためか、ダーツの段差をパターンの段階で訂正をすることなく縫われていた。

- ・ダック芯…前身頃芯、前アームホール増し芯、腰増し芯、衿、ポケット
- ・毛芯…パッド土台、腰増し芯
- ・綿芯…腰芯、袖口芯
- ・ドミット芯（起毛ニット芯）…後ろ芯、衿綿

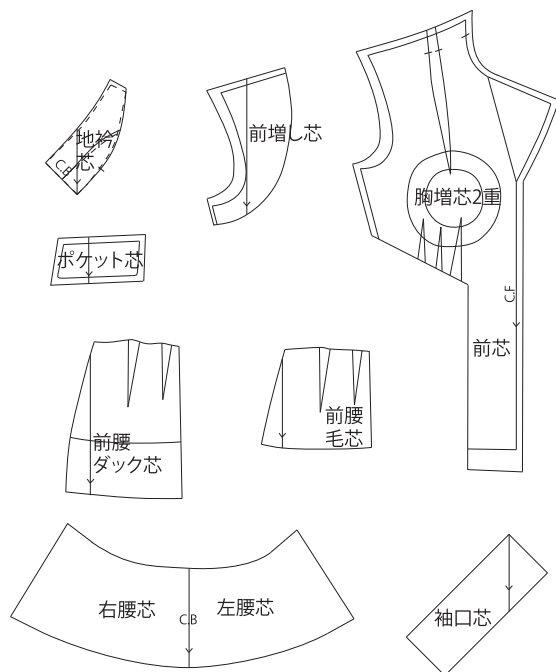


図6. 芯

5. 縫製復元による解析

5-1 パッド

現在の市販されているパッドは一番上に不織布か紗等の生地が乗り、コーティングという手法またはプレスで留めてある。これは生地に直接綿が付くと崩れやすいためであると思われる。今回、右身頃は資料と同様に綿のまま、糸で留めつけ、左見頃は紗を載せてコーティングをした。アイロンで良く押さえ付けたせいもあるが、綿のままの方が表生地になじみやすい感じがした。崩れやすいため量産には向かないが、ソフトに作る場合綿のままでも十分耐えられることが分かった。



図7. 綿のままの右パッド



図8. 紗を乗せた左パッド

5-2 芯

前身頃のダック芯はダーツを表生地同様に取り、重ね縫いと千鳥がけをした後に、肩からアームホールにかけて同じ芯で増し芯が付いている。裁ち端が見えな

い方向からハ刺しで留めているため、ハ刺しがやりづらかったが、内側の当りは出にくいと思われる。さらに胸部分にドミット芯（ニット起毛芯）が丸く段差を付けて2重につけられ、簡単に留めつけられている。腰部分の芯は毛芯とダック芯が2重になり、しっかり腰が張るように作られている。また、腰部分は綿芯で形を整えている。後ろ身頃はドミット芯（ニット起毛芯）がウエストから上部分全体に付いている。また、衿はダック芯が据えてある。袖口は綿芯が付いていた。



図9. 前芯ダーツ縫い代



図10. 前芯ダーツ縫い方



図11. 前芯ダーツ処理内側



図12. 前肩増し芯外側



図13. 前肩増し芯内側



図14. 前胸増し芯位置

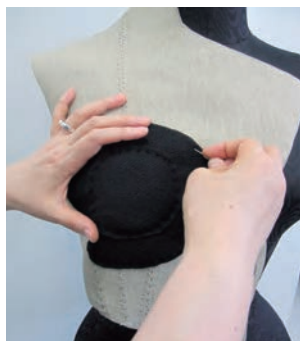


図15. 前胸増し芯留め方



図16. 完成した前芯外側



図17. 完成した前芯内側



図18. 前腰ダック芯ダーツ縫い代



図19. 前腰ダック芯ダーツ処理



図20. 前腰毛芯縫い代



図21. 前腰毛芯ダーツ



図22. 前腰芯合わせ



図23. 前腰芯完成

5-3 表身頃

前身頃ダーツを縫う場合、当たりを防ぐため生地を咬ませたりするが、そのまま単に縫い割りされ、縫い代がかがっている。後ろ肩ダーツは縫い割りのままで

何も処理されていなかった。また、現在アームホールや衿ぐりに伸び止めのテープを入れることが多いが、そのようなものは何も入っていなかった。

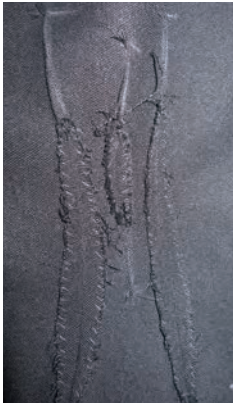


図24. 前表身頃ダーツ処理



図25. 後ろ身頃肩ダーツ処理

5-4 ポケット

ダーツを縫った後、ポケットを作成するが、その作りは現在と変わらず、同じ作りと思われる。ポケット口はまつり止めてあり、中の作りはきちんと袋布も付いているが、袋布の周りは手で1周簡単に縫われているだけで強度はない。見せかけで、使用されていなかったと思われる。



図26. ポケット芯据え



図27. ポケット縫い代処理



図28. ポケットフラップ完成



図29. ポケット完成



図30. ポケット口まつり始末



図31. ポケット完成裏部分

5-5 芯据えと芯始末

芯を据える糸は完成時にすべて取り除くため、実際には当時どのように留めていたかを知る手段はないが、ジャケットがメンズからきていることを思うと、ほぼメンズ仕立ての芯の据え方と同じで良いのではないかと考えられ、同じように留めつけた。但し、レディース独特の胸のふくらみや腰の丸さを十分考慮して芯据えを行った。



図32. 前身頃芯据え



図33. ラペルのハ刺しと縫い代

芯を据えた後、釣り合いを確認しながらラベルにハ刺しを行い、衿付け止まりから打ち合い先の縫い代を出来上がりから0.2cm手前まで切り落とす。裾は出来上がりで縫い代を切る。その後出来上がり間でタテ地テープを付け、手でまつりとめる。折り山にテープは入っていなかった。



図34. ラペル先テープ処理

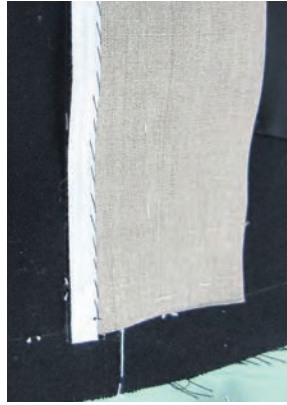


図35. 前芯裾部分テープ処理

5-6 見返し

ラペル部分の見返しを0.5cmで際まで縫い割りし、ラペル部分のカラー付け止まりまで縫い合わせ、割った縫い代の身頃側を芯にまつり止める。本来はカラー縫い止まりで切込みを入れてまつるが、肩縫い後のカラー付けのとき、芯を際まで切り、身頃側に倒してまつるため切り込みは入れない。

見返しはパターンを展開して型を作ったのではなく、沿わせて作ったと思われ、均等に開いた分量ではなく、左右の分量も違った。しかし生地には厚みがあるため手の加減である程度沿わせることが出来た。



図36. 見返しの接ぎ合わせ



図37. 見返し先縫い代始末

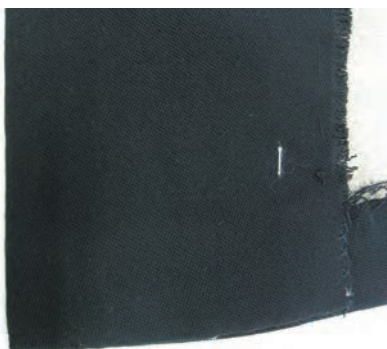


図38. 見返し裾部分始末

裾ヘムはパンツを縫う邪魔にならないところまで折る。

見返し裾の部分は手でたてまつりをし、裾ヘムの部

分と重なる箇所は千鳥がけでとめる。また、見返し先縫い代は芯に並縫いで止める。

5-7 ベンツ

後ろサイドベンツは後ろ身頃、裨奥、脇身頃の布を縫い合わせ、縫い代は身頃側に片返しをする。その後ベンツの折山から縫い代側にタテ地テープをまつりつける。

このテープは折り山の伸び止めにもなっているが、裨奥を縫いとめるときの力布にもなっている。

現在では裾始末をしてから裨奥始末をするが、最初に裨奥を縫っている。手順としてはやりやすいが、このジャケット生地のように、ある程度の厚みがない場合や、さらに厚い生地の場合は縫い代がごろつくと思われる。



図39. サイドベンツテープ入れ



図40. 裨奥留め

5-8 芯入れ

前身頃と脇布を縫い合わせ、縫い代ウエスト部分に0.5cm残して切り込みを入れ、アイロンで割る。



図41. 縫い代の切り込み

脇布が付いた段階で前腰芯を付け、ウエスト位置で左右の前腰芯の上にテープを止めつける。テープはウエストの長さに沿わせ、サイドベンツの縫い代がある箇所では千鳥がけで止めつける。その後、前腰芯を表

身頃に沿わせ芯据えを追加する。この作業は実際に行われたかはわからないが、その後の綿腰芯を入れるとき、動かず表にひびかないように入れるには有効であると思い、行った。裾ヘムは千鳥がけで止める。



図42. 前腰芯入れ



図43. ウエストテープ入れ



図44. ウエストテープベンツ位置始末



図45. 前腰部分追加芯据え位置始末



図46. 表身頃裾始末全体図

テープに綿腰芯を沿わせて入れるが、前腰芯の中段まで入れてテープと一緒に止めつける。前腰芯と重

なっているところは並縫いで止めつける。その後さらに縫い代のある箇所に綿腰芯を並縫いで止める。



図47. 綿芯テープに千鳥始末



図48. 腰芯全体図

背芯のドミット芯は後ろ身頃よりやや大きめに裁断し、ウエストより上に芯据えする。

脇の縫い代に縫い目まで重ねてドミット芯をかるく止めつける。



図49. 背芯据え



図50. 身頃芯入れ全体図

5-9 衿

現在では衿芯は0.5cmほどの縫い代を付けて重ね接ぎするか、左右繋げて一枚の芯を付けることが多いが、後ろ中心を裁ちきりにして、からげるように留めつけていた。中心が折れやすくなるのではと多少の不安があったが、当たりが出ずに滑らかに仕上がった。また、ハ刺しの方向は現在でもいろいろあるのでどの方法が良いと言えないが、折山線にテープを入れ、ぐし縫いをして、首に沿うように縮める事が多い現在と違い、折山線には何もしていなかった。折山からハ刺しの方向が違うので、目安として折山にしつけをしてからハ刺しを行った。芯は外回り1周出来上がりで切りそろえた。最終的にはこのしつけは外して完成させた。しかし小さめの衿パターンを付けているせいか、かなり首に沿う仕上がりになっている。



図51. 衿の芯据え



図52. 衿芯中心の接ぎ合わせ



図53. 左右の衿芯据え



図54. 衿のハ刺し完成

表衿はベルベット生地に地の目を後ろ中心タテ地に合わせ、大きめに粗裁ちをして、折山線で仮止めをして衿の形状に合わせて沿わせ、縫い代を1cmに切り揃えて千鳥がけでまつりとめた。付け側も出来上がりで折り曲げしつけで止めておく。

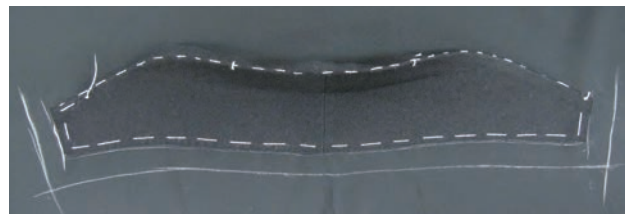


図55. 表衿合わせ



図56. 表衿粗裁ち



図57. 表衿折山仮止め



図58. 表衿千鳥がけ

5-10 裏生地

裏生地は、表生地に影響を与えず着やすさと型崩れを防ぐ役目ということもあり、ダーツは縫わずに門で留めるだけで沿わせている。後ろ中心は右ではなく左身頃側に片返し、縫い代は縫い割りしてウエストに切り込みを入れている。後ろ身頃にベンツがあるが、デザイン重視で本来の馬乗りの為の運動量の役目はなく、裾の綿芯で動かないように留めてあるが、裏生地もベンツのない状態で裁断し、後ろはつれないようにフラシ仕立てになっている。



図59. 裏生地後ろ・脇縫い合わせ



図60. 裏生地前裾始末

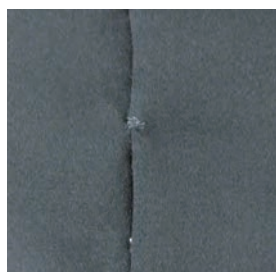


図61. 裏生地後ろ中心の門止め



図62. 裏生地タック部分の門止め



図63. 裏生地裏裾部分



図64. 裏生地後ろ中心裾部分(表)



図65. 裏生地裾部分全体(裏)

裾はかなり多めの3つ折をしてから並縫いで止められている。前身頃はだんだん開いて2つ折になって身頃に奥まつりで止めてある。



図66. 裏生地全体完成(裏)

表裏合わせは、オートクチュールということもあり、裏生地は表に沿わせて仮止めをして全て手作業でまつり留めてある。



図67. 表裏合わせ

5-11 袖

袖のパターンが現在の形状とかなり違い、前振りの湾曲した形になっていたため、捻じれてしまうのではないかと作成前は不安を感じたが、簡単なアイロン処理できれいに納まった。この袖はかなり前に曲がっているが、動きやすい形になっていて、真っすぐ手を下すよりも優雅な袖付けになっている。



図68. 表袖前側縫い合わせ



図69. 袖のアイロン処理



図70. 袖のアイロン処理後

内袖の形状に合わせて折山までアイロンで平らになるよう処理をする。その後折り山で折ってみるときれいなカーブの袖になる。



図71. 袖口芯据え



図72. 袖口表地裏完成

中綴じは効率や縫製方法の違いもあり、前後とも外袖縫い代側に倒して中綴じを行うのが一般的であるが、縫い代は割っている。前側は内袖側に中綴じを行い、その後前側を倒してから、後ろ側は外袖側縫い代に中綴じを行っている。



図73. 内袖の中綴じ



図74. 外袖の中綴じ



図75. 袖口裏明き部分完成



図76. 袖完成

5-12 肩縫い

肩は表生地通しを縫い、前芯を沿わせてのせた後、後ろ身頃のドミット芯をのせて軽く留めてある。

アームホールは芯も一緒に袖付けをするため仮止めを行う。



図77. 肩縫いと芯始末



図78. 肩線（表）



図79. アームホール仮止め

5-13 衿付け

メンズのカラークロス仕立てと同様に地衿に表生地を沿わせ、中縫いでなく、かぶせて千鳥がけで留めつけている。表衿の付け側を前ネックポイントまで見返しとミシンで縫い割している。身頃も出来上がりで折り、軽く奥まつりで留めつけてから、たてまつりで地衿を縫っている。後ろ中心の表衿は衿を後ろ身頃に伸ばして縫い代に止め、裏生地をのせてまつっている。すべて切り込みはなくだんだんと沿わせてまつりとめている。



図80. 表衿付け

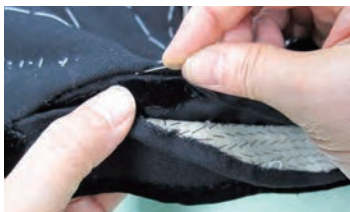


図81. 衿の付け部分まつり



図82. 表衿後ろ中心の止め

5-14 袖付け

袖は前後身頃の芯ごと縫いつけ、そのあとパッドを留めて裏生地のアームホールを軽く留め、袖裏をまつりとめている。

アームホール形状は前に向かって割れた楕円形状になっている。



図83. 身頃アームホール形状



図84. 袖山ミシン縫い

袖山はぐし縫いをして山のふくらみを整えてからつけるのが一般的であるが、ぐし縫いの跡がなく、袖山の縫い代は袖付け線から波打っていたので、同じように、ぐし縫いもアイロンで整えることもせず直接指の腹あたりを見ながら合印を合わせ、袖付けを行った。多少不安であったが、布が地厚であることと、いせ分量が少なめであったことで簡単につけることができた。



図85. 袖の仮縫い



図86. 袖の振り

合印を頼りに袖付けを行ったが、出来上がりは実物と同じ振りになり、脇の切り替え線の見え方も同じ寸法のところで袖が止まった。



図87. 肩パッド付け



図88. 衿綿と裏地
中綴じ

肩パッドは山のほうは見返し縫い代に千鳥がけで約3cm止めてあり、アームホール側は左右4～5cm開けて縫い代までなみ縫いで簡単に止めてある。

衿綿は前12cm、全体で23cmの5cm幅のものがアームホールの縫い代1cmに合わせてなみ縫いで止まっていた。

裏地の縫い代は中綴じがされていず、裏袖山のまつりがところどころアームホール縫い代まで留めてある程度だったが、今回はアームホール縫い代を確定するため、簡単に1周並縫いで止めた。



図89. 袖山裏地始末

裏袖山は絹糸で1周ぐし縫いがされ、その糸をからげるように斜めまつりで1周かがってあった。

裏地袖山の下部分の縫い代が少なく、袖を引くと少しつれて袖下が巻き込まれるが着装しているとあまり目立たない。

しかし、現在のように裏地で縫いつれが起こらないように余裕のある縫い代付けをしたほうが、内袖のラインがつかない。資料はアームホールの中綴じがされておらず、身頃のゆとり分がそのまま不足分を補っていたと思われる。これは量産する場合には不具合が生じるとと思われる。

5-15 ボタンホールとボタン付けおよび縫製のまとめ

ボタンホールは手で開けている。ボタンの足はかなり多く付いている。

身頃のボタンホールははと目穴であったが、袖のボタンホールは眠り穴で、ボタンの直径と同寸であるため、袖口開きはきちんと本開きに仕立ててあるにもかかわらず、ボタンをはずすことが出来ない。

今回はボタンホールのサイズを資料と同じにしたが、ボタンが2mm小さいものしか用意できなかったため、はずすことが出来る。



図90. サイドベントボタン付け

ジャケットの仕上げとして、ラペル外回りの星止めなどが上げられるが、今回はそのような仕上げはされていなかったため、毛芯の仮止め糸を取り除き、仕上げのアイロンを行うにとどめた。



図91. 復元作品・前



図92. 復元作品・後ろ



図93. 復元作品・右



図94. 復元作品・左

6. 着心地の確認

今回の資料ジャケットは、共同執筆者である中村が実際に着装できるサイズであったため、着心地と現代の日本人体型の被験者が着装したときのシルエットについても確認した。



図95～98. オリジナル資料 着装 右・前・後ろ・左



図99～102. 復元作品 着装 右・前・後ろ・左

素材の厚みや光沢が違うことや、先に述べたように芯の素材が同じでも風合いが多少違うなど、少しずつの差異が影響していると思われるが、現代の日本人体型に着装しても、後ろのウエストの生地が吸い付ききれいなシルエットとなっている。着心地については、ウエストなどの圧迫感は同じという着装者の意見であった。ただし、裏地に使用したシルク生地のすべりが復元作品のほうがよかったためと、肩処理をつい前肩になるようにアイロン処理してしまったため、前肩の当たりがなく、復元のほうが着心地がよくなってしまった。アイロン処理は数値では表しにくく、反省点でもあり、今後の研究に向けての課題でもあったと感じた。

7. まとめ

今回の縫製を行った結果、現在では接着芯の進化で、腰を張らせるなら厚めのしっかりした接着芯を貼るところだが、形づけられた芯を入れ、綿芯の薄いもので吊るなどすることでかなりしっかりしていながらもソフトな作りが出来ることが分かった。作り上げていく過程でボディに着せていくとだんだんきれいな立体が出来上がっていき、内側から彫刻するような感覚であった。当時のオートクチュールの縫製方法には手作業も多く量産化には難しい面もあるが、どのような

立体造形を作り上げたいかにより、一部でも活用できるとし、今後の接着芯地開発などにも参考になると思われる。今後も違う観点からさらに研究していきたいと思っている。

註

- 1) 平成23～25年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究報告書「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」杉野服飾大学、2014. pp. 136-141
- 2) 平成19～21年度 私立大学学術研究高度化推進事業オープンリサーチ・センター研究成果報告書「現代衣裳の原点を探る－ウォルト作品の復元－」杉野服飾大学、2010.

* 上記2冊の報告書については、杉野服飾大学ホームページから検索してすべてのページを読むことができる。URL (<http://www.sugino.ac.jp>)

参考文献

- ・『バレンシアガ衣装展 CRISTOBAL BALENCIAGA』財団法人ファッション振興財団、1987.
- ・マリー＝アンドレ・ジュヴ『BLENCIAGA』光琳社出版、1997.
- ・Pamela Golbin, *Balenciaga Paris*, Thames&Hudson, 2006.
- ・Miren Arzalluz, *Cristobal Balenciaga, The Making of a Master (1895-1936)*, V&A, 2011.
- ・*Balenciaga*, Cristobal Balenciaga Museoa, 2011.